

社会福祉法人征峯会 ◎理事長 渡辺和成

幸せを感じられる福祉で地域に“笑顔”を増やしていきたい

社会福祉法人征峯会では、人間の究極の4つの幸せといわれる「人に愛されること」「人にほめられること」「人の役に立つこと」「人から必要とされること」を社訓に掲げ、利用者もスタッフも日々、この幸せを感じながら過ごせる環境づくりに取り組む。1987年に障害者の更生施設からスタートした同法人は、その後、グループホーム、特別養護老人ホーム、大規模デイサービス、総合相談支援センターなどを拡充してきた。

「人材の育成・確保と安定経営が今後の事業のカギを握る」と語る渡辺和成理事長に話を聞いた。

「経営方針発表会」「経営企画室の合宿」等人材育成に注力

さまざまな施設をつくり、サービス拡充を図る中で“征峯会らしさ”を追求する。理念や基本方針、経営目的、経営目標を1つにまとめた「経営指針書」を毎年つくり、全職員が一堂に会し経営方針発表会を行う。渡辺理事長は次のように語る。

「300名を超える職員を抱え、理念や方針を全員に伝え、ベクトル

を合わせることは難しいですが、同じことでもずっと言い続けなければいけません。また、あまり接点のない障害者の分野と高齢者の分野の人たちが交流し、取り組んできたことを発表し、お互いの理解を深める。経営方針発表会は大事な場です」

また、人材育成にも力を注いできた。

「法人の理念やお金のことも理解してマネジメントしてくれる人を中心に多くつくれるかが重要です。もともと福祉の人材は数字が苦手な人が多いのですが、とはいえ、理念の『り』と利益の『り』がバランスよく保たれている状態が、経営していく上では必要です」と、年に2回、法人の未来について話し合う経営企画室の合宿を行ってきた。そして、この合宿で話し合われたことがさまざま現実のものとなってきたという。

スタッフの意見からつくった「大規模デイ」「総合相談支援」

2014年の大規模デイサービスや2020年の総合相談支援センターの開設も、その一例である。

「もともとデイサービスは行っていましたが手狭になってきたので、大規模デイサービスをつくること



渡辺理事長を中央に、川井義久税理士（左）と監査担当の黒澤匡史さん（ひたち野総合税理士法人）

が話し合わせ、そこから全国のいろいろな施設を見学に行き、私たちの理想を詰め込んだ大規模デイサービスをつくりました。昨年は総合相談支援センターを開設しましたが、これも高齢者、障害者の垣根を越えたワンストップで複合的な悩みに対応したいという意見から、つくることにしたものです」

大規模デイサービスは同法人を象徴するような特徴的な施設である。同法人では特養の新築移転の際に現在の場所を拠点とするようになったが、その際、人生の終わりの時期に近づいている人々を南国風の明るい広々とした空間で支援することにしたのだ。大規模デイもその一角にある。芝生やシュロの木々に囲まれ、職員のユニフォームはアロハシャツ。リハビリ施設、浴場、プールのほか、パチンコ、カラオケ、麻雀等々。プログラムは利用者本人が選ぶことができるので、とても喜ばれる。利用者は120名超と多くが活用する。しかし、新型コロナの影響を

受け、一時は半減したのだという。「デイサービスは高齢者の部門の入口部分なので豪華につくりました。利用者が当日プログラムを選ぶので支援する側は人手もかかりますが、利用者には楽しんでいただく。その結果、ショートステイや特養の利用につながっています。職員には利用者が満足するようなサービスを提供していれば知人を紹介してくれるのだからと、質の高いサービスを提供していこうと言っています」と、利用者数130人を目標に取り組んでいる。

積極的に地域と交流し開かれた社会福祉法人

もう1つ特徴的な取り組みは、地域との交流であり、その最たるものが秋祭りの「しらとりまつり」だ。昨年と本年はコロナ禍で開催中止となったが、例年は2日間でおよそ1万5千人が来場するという。まさに地域に開かれた社会福祉法人であり、法人設立時から最も力を入れてきたことだ。

「征峯会は、私の父と母が創業し、実家の道路を挟んで隣に障害者の入所施設をつくったのが始まりです。地域に開かれた家庭的な“施設らしくない施設”をつくりたいと、その頃から地域の人を呼んでカラオケ大会や運動会などを開催してきました。

お祭りも、もう25年ぐらいずっと続けていますが、幼稚園生や小学生、中学生、高校生、大学生の発表をプログラムに組み入れると、お父さんやお母さん、おじいちゃん、おばあちゃんが見に来てくださり、にぎやかになります。ほかにもお笑い芸人や演歌歌手など、40団体にステージ発表をしてもらっています。熱気球を上げたこと

(写真上) 特別養護老人ホームしらとり
(写真中) 「パン工房しらとり」と「cafeラパン」
(写真下) 障害者のいきがい活動として「しらとり太鼓」の公演活動も行っている

もあります。幅広い人を楽しんでいただきたいのです」

12年前に特養などの施設を現在地につくってから、隣接するのが筑西市の総合運動公園のため、体育館やグラウンド・広大な駐車場もある。地域との交流をさらに拡大していこうと実行委員会で企画してきたのだ。

働く人の笑顔で、“地域の笑顔”につなげていきたい

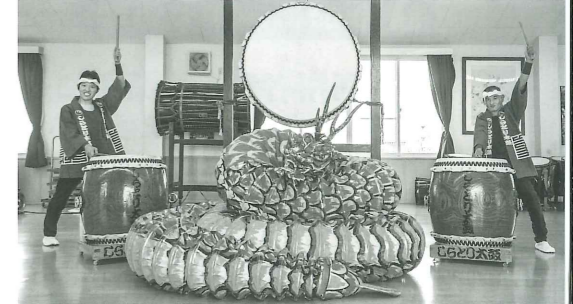
就労移行支援、就労継続支援B型事業としては、カフェレストランやパン工房に取り組む。地元では「しらとりパン」として名がとおるほど人気となっている。店舗での販売のみならず、「道の駅」での販売や出張販売もする。また、詰め合わせクッキーは筑西市のふるさと納税の返礼品としても取り扱われる。

B型事業として最近始めたのは職員の車の洗車サービスだ。ほかにも、特養や大規模デイサービスのリネン類の洗濯、芝刈り、消毒作業など、利用者の仕事をさまざま増やしてきた。

その一方で課題となっているのが、働き手の確保である。

「筑西市は2035年ぐらいまで介護や障害の需要はずっと伸びますが、働き手はなかなか集まらない。10年後、20年後を考えていくと外国人の働き手も必要になります。ですから、そういった人たちが働ける教育もできる場をつくる必要があります。それとやはりIT化も必須でしょう。

もう1つは、社会福祉法人がおかれる経営環境です。社会福祉法人の3分の1が赤字という状況にある中で、国は合併手続の整備や連携推進法人制度を創設したりと、



社会福祉法人の安定経営を求めています。つまり、規模の大きい法人でしっかり経営している法人に統合していく流れです。筑西市内には23の社会福祉法人がありますが、将来は10分の1ぐらいになる可能性があるわけです。そのような中で私たちは生き残っていかなければなりません。ですから医療の分野にも進出し、幅広い分野をカバーし、包括的にサービスを提供できる法人になることが必要だと思います。具体的には、まず小規模多機能型居宅介護を再来年に立ち上げる予定で、それを各地に拠点として配置していくことを計画しています。それには、今まで以上にしっかりと経営とともに、行政からも信頼される法人になっていくこと。いずれにしても、理念の“最高の笑顔をあなたに”の実現には、働く人に集まっていたいただき、その人たちが笑顔で働ける環境を私たちがつくり、それによって利用者の笑顔につなげる。それが地域の笑顔につながっていくのではないかと考えています」
(令和3年9月14日/取材協力・ひたち野総合税理士法人)